

3) 子牛の肺炎

肺炎の発生は、いくつかの原因が重なって生じる場合が多い。よってその予防にも複合的な予防が必要となる。環境的な原因に対する予防については、既に前述しているので割愛するが、その重要性は非常に高い。感染性の原因に対する予防上も、換気や舎内の衛生管理の徹底は感染症の種類を問わない予防法の基本である。特定の時期や特定の症状の肺炎が多発する場合には、原因となる病原微生物を獣医師の協力のもとに特定し、それに合った対策をとることが必要となる。

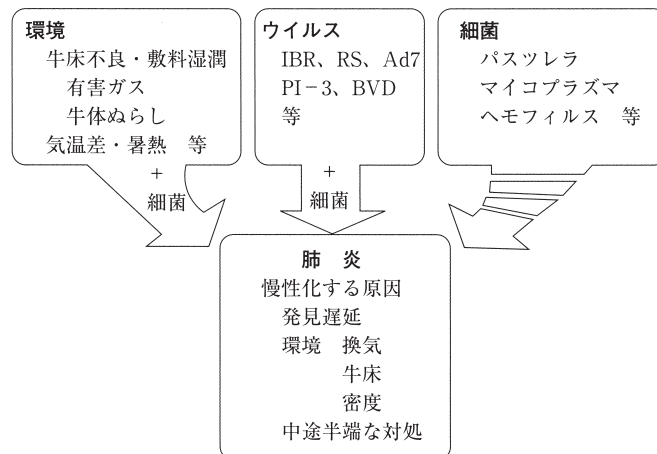


図22 肺炎の原因と発生機序（長谷川隆 1999）

（農文協「生産獣医療システム 肉牛編」より）

また、肺炎が発生した際には、当該牛の治療と同様に他の同居牛あるいはその後その施設で飼養される子牛への伝播阻止が重要な課題となる。抗菌剤に依存した肺炎への対抗措置はより強力な薬剤耐性菌の発生を促してしまいうし、自己判断による加療中止は肺炎の慢性化と当該牛による継続的な病原微生物の拡散を招く。

肺炎が発生した場合は、早期隔離、早期治療、徹底消毒が非常に重要であるので、症状の軽重を自己判断せずに獣医師の診察・指示を受けることが望ましい。消毒薬の選定に際しても耐性菌への考慮を含んだ専門的な知識が必要であるし、適切な予防接種の計画・実施のためにも伝染病等に対する専門知識が必要である。肺炎の予防には、獣医師との連携をしっかりとすることも大切である。

4) 予防接種

子牛の抗体生産機能は、先に述べたように、生後1ヵ月ごろから発達が始まりおおよそ生後5ヵ月ごろに成牛なみの抗体生産が可能になるとされている。生後1ヵ月未満の子牛は、初乳由来の移行抗体の効果があり抗体生産機能が未熟なため、予防接種による疾病発生率の低減の効果は薄い。

予防接種プログラムの作成は、疾病の発生状況や牛の健康状態、飼養環境、衛生管理状況等を検討し、それぞれの地域、場合によっては農場ごとに作成することにより効果

的になる。また、予防接種には、感染・発症予防という意義と同時に、病原体のまん延防止の効果もあるので、獣医師と連携して適切に実施することが重要である。

***** 予防接種時の留意事項 *****

- ①接種前に対象牛の健康状態を確認し、異常が認められれば接種を中止する
- ②加療中の牛、治癒後間もない牛の接種は慎重に検討する
- ③接種後はできるだけ安静な状態を維持する
- ④接種後に牛に異常が発生した場合には、速やかに獣医師の診察を受ける
- ⑤接種するワクチン（特に油性アジュバントワクチン）の出荷制限を注意・順守する

5) カビ毒 (Mycotoxin)

カビ毒は動物に対し有害で、現在までに300種ほどの飼料由来のカビ毒が確認されている。牛に対しては牛の健康と生産性に悪影響を与える。主たるカビ毒とその毒性あるいは症状は表の通りであるが、乾草やサイレージなどの飼料中のカビ毒汚染に対する予防対策が必要である。哺育や肥育では、下痢、食欲減退、第一胃運動減退、流涎、被毛粗剛などである。

◎カビ毒と毒性

主なカビ毒		毒 性
アフラトキシン	AFB1	肝臓毒、腎臓毒、免疫低下、発ガン性物質
デオキシニバレノール	DON	腸炎、下痢、免疫力低下、採食減少
ゼアラレノン	ZEN	繁殖毒、流産、胚芽死

◎カビ中毒の症状

急 性	慢 性
下痢、食欲廃絶、低体温、皮温低下、第一胃運動減退、腫脹（肛門、陰部、眼瞼）、流涎、起立不能（低Ca血症）、じんましん	軟便、乳量不安定、繁殖性低下、被毛失沢 子牛：末端壊死（後肢、尾、耳）

◎カビ毒吸着剤について

カビ毒の吸着剤（添加剤）は大きく分けて2種類がある。

一つはカビ毒そのものを吸着するものと、酵素又は生菌によってカビ毒の科学的構造を